

文教科学委員会 専門員

みのべ はるひこ
美濃部 寿彦

今常会は、教育に関し、教科書採択、私学経営、教育委員会制度等をめぐり、活発な議論が交わされている。このような国会における政策論戦を追い掛ける傍ら、時折見聞きする事柄に教育の原点とも言うべき情景に出会い、一服の清涼感を味わうことがある。最近こんな感じにさせてくれた本と映画についてご紹介することとしたい。

一つは、坪田信貴著『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』(KADOKAWA 2013年)というベストセラーでご存じの方も多いのではないだろうか。主人公は、名古屋に住む私立高校2年さやか。素行が悪く無期停学を繰り返し、系列大学への内部推薦も外部進学する学力もなく、本人は適当にバイトでもして結婚して早めに子育てして、それなりに幸せだろうなと思っていたところ、一人の学習塾講師と出会い大学合格を果たすまでの笑いと涙の実話である。入塾テストでは、「strong」を「日曜日」と訳し、「聖徳太子」を「せいとくたこ」と読み、太ったかわいそうな子と言っていたという。しかし、塾講師は自らの声掛けに、「よろしくお願ひします」と返したことから「見た目はドギツイが根は素直ないい子」との印象を持ち、また講師の「これもできないのか、君はすごいねー。頭の中は空っぽだ。でも君みたいな子が慶應大学に行ったらおもしろいよね」と笑って言う言葉に、さやかは「不思議と嫌でなく肯定されている感じ」を持ち、ここから先生に褒めてもらいたい、何より勉強してものを知ると先生のようなおもしろい話ができるようになるかもしれないと信じ、苦勞を重ね目的を達成する。教え教えられる関係は、正にこの相互の信頼関係を基礎に初めて成立することを改めて思い起こさせてくれる。

もう一つは、「世界の果ての通学路」というフランスのドキュメンタリー映画である。世界4か国の少年少女が命の危険を冒しながら遠距離を通学する真摯な姿を、厳しい自然とともに淡々と描く記録映画である。ケニアの11歳の少年は、妹と毎日片道15キロを2時間かけて、象やキリン等の野生動物の襲撃を顧みずパイロットになる夢を追う。アルゼンチンの11歳の少年は、6歳の妹と馬で片道18キロを1時間半、パタゴニアの石ころの平原を越え獣医を目指す。モロッコで医師を目指す12歳の少女は、二人の友人と片道22キロを4時間、アトラス山脈の辺境の村から月曜に学校に向かい金曜に帰る生活を送る。また、インドでは障害で歩行不自由な13歳の少年が、ベンガル湾の漁村から片道4キロを1時間15分二人の弟に車椅子を押され、同じような障害を持つ子供のため医師を夢見て通学する。勉学への強い意志と将来への希望は、遠距離通学をいとも軽々と克服するのである。

教育に関わる課題は、その国を取り巻く社会経済状況に大いに影響されるものであるが、個々の政策を論ずる場合にもこのような教育の原点を忘れないようにしたい。